
報告者名	菊地 暁	被調査者生年	1933年(男)
調査者名	菊地 暁	被調査者属性	原契約講長
補助調査者	なし		

話者家について

話者家は原の農家だった。祖父が分家した1代目。本家は2軒隣で工務店をしている。十数代、300年ほど続いている家だ。

父は満州事変の時、北朝鮮で警備隊を務め、日中戦争でも応召した。昭和15年、仙台陸軍病院で亡くなった。死因は胃潰瘍。

話者は昭和8年生まれ。生まれたのは原。茅葺きの家に住んでいた。戦時中、海軍工廠建設にともない現在地に移転。当時は物資がなく、瓦吹であるものの、粗末な家だった。

移転後も農家を続けていたが、仙台新港の建設にともない、桜木の農地を買収され(千刈田に若干の畑が残り、10年ほど前まで細々と耕作を続けた)、いろいろ考えた挙げ句、食堂を開くことにした。昭和38年開業。当時は今と違って近所に飲食店はほとんどなく、そこそこ繁盛した。店舗は今のもので3代目。

子供は男が2人と女が1人。娘には孫がいる。長男が店を手伝ってくれている。

海軍工廠

この地に移転したのは小学生の正月のことだった。家や田畑は強制買収された。軍国主義の時代でどうしようもなかった。八幡のほか、利府、下馬、高崎などに移転した人もいる。戦時中は八幡神社も一時疎開した。

工場の建設には、強制連行された朝鮮人、宮城刑務所から連れてこられた囚人、「菅原組」が北海道や九州から手配したタコ部屋労働者などがあっていた。重機もなく、スコップで全部作業していた。着るものもフンドシー本、食事も十分ではなかったようだ。そこで亡くなった人を埋葬するのを見たことがあったが、ほとんど捨てるようなもの。無残、残酷だった。突貫工事だったため、政府も強制労働を認めていたらしい。

工場が出来上がってからは、学徒動員があった。わずか2年で終戦を迎えたので、大して役に立たなかったものと思っている。

臨海鉄道も軍事輸送のために戦争中に作ったもの。後に、ある市議員が、鉄橋に人柱があったのではないかと問題にしたのだが、鉄橋を壊した跡からは何も出てこなかった。その市議員は関東の出身で、戦時中にこの辺りにいたわけではなく、伝聞をもとに告発しただけ、証拠不十分だった。

最近、多賀城海軍工廠に関する冊子が出版されたが、戦時中にはなかった病院があったことになっているなど、いろいろ間違いがある。

若い人はそのあたりの経緯にあまり関心がない。『恩讐の彼方に』(有志がまとめた移転前の郷土誌)のコピーを配ったことがあるが、すぐなくしてしまった。

仙台新港

このあたりも移転した当時は田んぼばかりだった。川には大きなライギョや食用ガエルがいて、それを捕まえて食べると美味しかった。

昭和39年に仙台湾地域が新産業都市に指定されると、仙台港建設のため、農地が買収されることになった。国

道 45 号線の拡張工事でも買収されているので、海軍工廠とあわせて、合計 3 回も買収されたことになる。土地の値段は安く、しかも現金ではなく県債による買い上げだった。

農家を続けられなくなったので、食堂に転業することにした。最初は何もわからなかったので、父方のおばのツテで食堂経験者を紹介してもらった。その店を現在も続けている。

原契約講

原契約講はもともと 20 軒ほど加入していたが、その後、移転や辞退する家があり、現在は 13 軒が加入している。震災で移転したのは 2 軒。契約講は親睦のためのもの。昔は人数も多く、春秋の 2 回に 100 人ぐらいが集まったが、現在は年 1 回、3 月初めに総会を開く。家や公民館ではなく、近場の飲食店などでの移動総会となっている。1 泊することもあった。

このほか、(栃木県の) 古峯神社のお参りにも行く。4 軒の組が 2 つ、5 軒の組が 1 つで順番に行く。

原契約講では震災の犠牲者が 1 名でた。講員で告別式の受付などの手伝いをした。

旦那寺

旦那寺は家ごとに違う。原でまとまっていたわけではない。話者家は、もともと鍋沼の専能寺(浄土真宗)の檀家だったが、昭和 48 年に宝国寺(臨済宗)に移した。墓石も移した。宗派が変わったため、法名も半分変えた。専能寺までは、歩いて行くと半日もかかり、不便だった。

大聖不動明王

原は八幡神社の氏子になっている。中谷地の萩原神社のように、自分たちの神社をもっているわけではない。

移転前の原の道端には、大聖不動明王があった。強制買収の時、現在の JA 多賀城の向かいにいた O さんの父が引き取り、家の一画に収めた。その後、そこを売ることになったので、菅野造園が引き取った。さらに、O さんが「もともとはオレの神様だから」と引き取った。こういうことが何度もあってはいけないので、念書をとって引き取らせた。神様のたらい回しだ。

最初は原契約講で祭ったが、今は O さんに任せている。祝詞をあげて拜むホトケガミだったのだが、八幡神社の先代宮司がそれはダメだといっていた。

被災後

東日本大震災の時、津波はこの家で 1 メートル 20~30 センチの高さがあった。店にも浸水し、ガラス戸や水道管、冷蔵庫、ストーブ、畳 30 枚などをやられた。その時かけていた保険は下りなかった。

震災後は住宅が少なくなった。津波への恐怖から、戻ってこない人もいる。客足も減った。オイルショックの時もひどかったが、今ほどひどくはなかった。平成になってから年々景気が悪くなってきたところに、地震が追い打ちになったかんじだ。